

らない。併し我々は、こゝに、我々のスピノザ研究に、新に一人の力強き友を興へられたことを感謝しなければならぬ。

第一巻巻頭には、スピノザ全集の解題が附せられてゐる。我々は、それによつて、テクストの形成が、如何に多くの學者達の共同の勞作の成果であつたかを知る。それに續く序説に於ては、スピノザの時代に對する明かなる展望を興へられ、そしてそれは彼の著作の理解によき手引となるであらう。次に、我々は譯者の努力に感謝しつゝ、本文を読む。彼の簡潔なる文章は決して我々を惱まさない。そして我々は、所々に見出される意味の不明瞭なる章句、言葉の不整なる順序、傍註せる原語の誤植等の訂正を希望する。

かつて、一九二七年、スピノザ二百五十年忌に際してあらばれたデボリン、タルハイマー等のスピノザ解釋は我々にもスピノザへの新なる關心を喚起したが、今年生誕三百年を記念して刊行される齋藤氏の邦譯スピノザ全集も亦我々のスピノザ理解に對して大なる貢獻をなすであらうことを信じて疑はない。聞くところによれば、氏は全四巻を今年中に譯り刊行せんとする。我々は氏の惠まれたる天分に畏敬の念を禁じ得ないが、早急に稿を進められることなく、推敲に推敲を重ねられて、この大事業を遺憾なく成就されんことを切望して已まない。又、古くから、我が學界に貢獻せる書肆内田老鶴圃が、内容に相應しき高雅なる装釘を以て、而かも異例の廉價を以て刊行されたるその犠牲的精神に敬意を表する。

(紹介者、服部英次郎、内田老鶴圃發行、定價金貳圓五拾錢)

藤井博士全集第五卷

「倫理と經濟、マルキシズム批判」

故藤井健治郎著

本書には故藤井健治郎博士が、その人格主義的立場から經濟的諸現象を考察し、マルクス主義を批判された諸論文が輯められてゐる。博士の道德と經濟との問題に關する基礎的な見解は、第一冊の「道德と經濟との關係についての諸方案」中に述べられてゐる主として、それは、唯物史觀的見地から、經濟生活は何等道德的規範に制約せられることなくその獨自の途を進むべきであるとする、ゾンバルトの所説の批判を中心に展開されてゐる。博士は夙くから、道德現象を客觀道德と主觀道德とに區分すべきことを提唱されて、道德の歴史性を充分に認容しつゝ、而も他方その先驗的な妥當性を保證し得るの途を提示されたが、道德と經濟との關係の考察に際しても、此の見解がその基底をなしてゐる。道德が客觀道德を意味する限り、それは當然歴史的に社會的に制約されてゐるものであり、其他一切の社會的制度と同様に生滅變化するものなることは事實である。従つてゾンバルトの言ふ如く「進歩しない舊時代の道德觀念を以て進歩した新時代の經濟組織を律せんとする」ことは確かに誤りである。併し主觀道德の見地から考察する時はまた自ら異つた觀を呈する。

此の見地からすれば、經濟的行爲と道德的行爲とは二者別のも

のがあるのではない。その目的、即ち内容の観方から観て經濟的行爲とされるものが、その形式の観方から観て道徳的行爲とされるのである。」(「ゾムバルトが社會政策の理想、即ち現實に比して出来るだけ多くの生産を増進せんとする所の目的は、唯それのみを目的とすれば十分であつて、換言すれば自律的であれば十分であつて、その經濟以外、倫理其他何等の制約を被るに及ばぬと言つたのは、それは内容の方面から言つたものであつて、固より當然の言である。しかしそれがそのまま、形式方面からも觀られ得るもので、そこに道徳的に價値がある、若しくは價値がないといふことが現れてくるのである。而も其價値の有無は其社會政策の社會其者に現した結果が、望まじきものであるとか嫌ふべきものであるとか、若しくは幸福を増進するものであるとか、又それを減殺するものであるとかいふことに依つて、決定されるものではなく、全く其形式によつて規定せられるものである。即ちそれ自身「特殊理想を有つた所の(「經濟」)行爲が直ちに道徳評價の對象となるのである。」)

かくして、純粹に經濟的と目せられる様な種々な範疇にも既にその形式的側面としての倫理的要素の含まれてゐることが明かにされ、更に理想なる觀念を分析して、社會現象を單に因果必然的にのみでなく、目的論的に説明すべきことの要が説かれてゐる。

第一冊には尙ほ「勞働」「財産」「現代産業組織」並に「都市」に對する各個別の倫理的考察の他に、「アリストテレスの倫理と經濟」「アダム・スミスの根本思想に就いて」の二論文が載せられてゐる。

第二冊にはマルキシズムの紹介、分析、批判に關し、大正三年から昭和四年に至る七篇の論文が集められてゐる。マルキシズムが故博士によつて迅速く我國に紹介され、その「唯物史觀」なる譯名が故博士の命名によるものであることは既に周知の事實である。

一、「唯物史觀の解剖と其素成分」の中ではマルキシズムの概觀がヘーゲルの辯證法哲學、フオイエルバッツハの人間學的唯物論、サンシモンの歴史の經濟的解釋、ダーキンの進化論との關係に於て與へられてゐる。二、「唯物史觀の要訣及びそれについての考察」の中では唯物史觀に關聯して、認識論的見地から一般に歴史法則の可能性の問題が論ぜられて居り、三、「唯物史觀と歴史法」はその補遺とも見らるべきものである。こゝでは、歴史法則は單に因果必然的のみでなく、之を目的論的見地から考察する場合に始めて十全な意義を得て来る、従つて歴史を因果必然的に解釋しようとするマルクス主義も、結局は私かに目的論的見解をとり入れなければならぬ破目に陥つてゐることが指摘されてゐる。

四、五、六、にはそれぞれ、マルクス主義の國家觀、餘剩價值説階級闘争論の紹介と共にその倫理學的批判が述べられてゐる。七「唯物史觀の倫理學的・社會學的・心理學的批判」は前掲諸論文を總括したものである。(紹介者坂田吉雄 玉川學園出版、定價參圓五拾錢、分冊、定價各壹圓五拾錢)